

## チェチェン革命とドゥダーエフ体制

野田 岳 人

### 要 旨

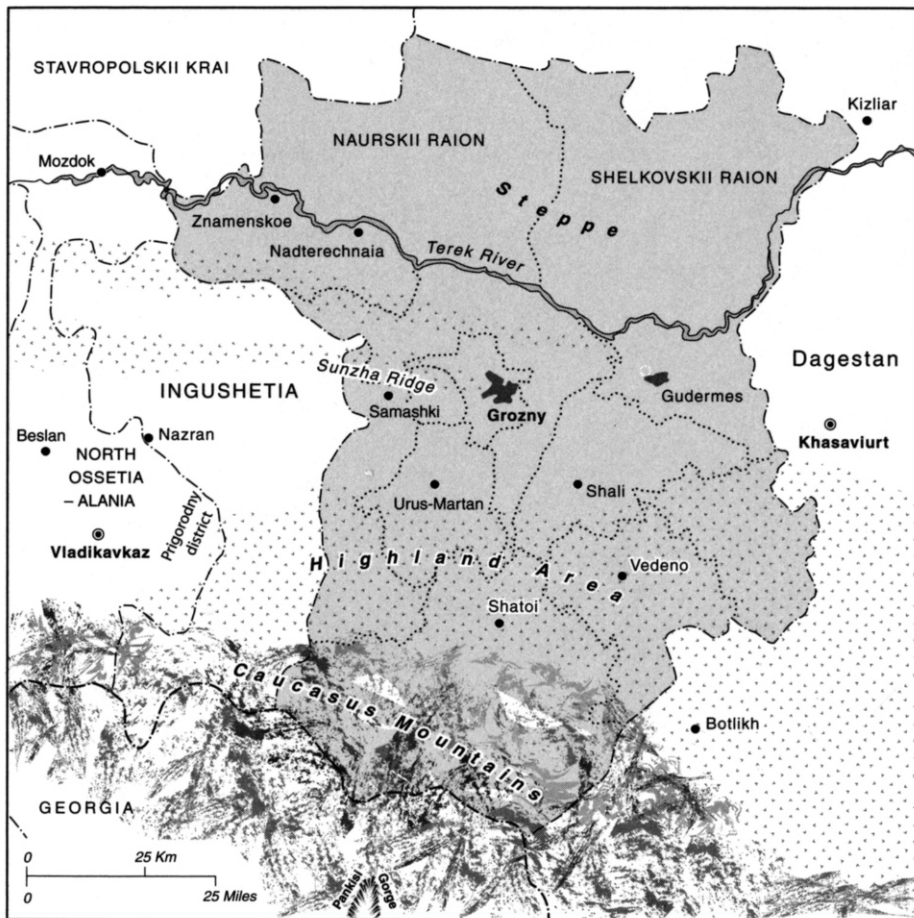
本稿は、チェチェン紛争の前史として、チェチェン革命に至る道程（1989～91年）からドゥダーエフ体制の成立（1991～93年）、その崩壊（1993～94年）までの時期を対象とし、チェチェン・ナショナリズムの観点からチェチェンにおける政治状況を分析しようとするものである。チェチェンにおけるナショナリズムは、チェチェン革命期には、チェチェン・イングーシをまとめた統一体を目指したヴァイナフ主義から、単独で独立を目指すチェチェン主義へ転換する。ドゥダーエフ体制が成立した後は、アイデンティティの範囲はさらに縮小し、最終的にはチェチェン人の中の集団間政治へ陥る。こうしたアイデンティティの範囲の縮小は、脱共産化の過程においてさらに促進させられる。本稿では、まず、チェチェン・ナショナリズムの特徴を分析し、次にチェチェン革命におけるナショナリズムの果たした役割を見る。最後に、ドゥダーエフ体制下における集団間政治を考察する。

【キーワード】 チェチェン イングーシ 紛争 革命 ナショナリズム 脱共産化

### 1. はじめに

チェチェン<sup>1</sup>ロシア南部、北カフカースに位置する内陸国である。東部および北部はダゲスタン共和国、北西部はロシア・スタヴロポリ地方と北オセチア共和国、西部はイングーシ共和国、南部はグルジア共和国と接している。首都で最大の都市はグローズヌイであり、国のほぼ中央に置かれている。総面積は約15,900平方キロメートル。人口はおおよそ100万人<sup>2</sup>である。次ページの地図を見てもわかるとおり、チェチェンの領土はとても多様性に富んでいる。北部には平原が広がり、グローズヌイ付近では森林がある丘陵地帯となる。共和国の南側半分は険しい山岳地帯で、このカフカース山脈はグルジアとの国境を分けている。

カフカースは多言語・多民族地域である。言語状況は複雑で、系統上他の語族や諸語に区分できない言語（カフカース諸語）が50種類ほどあり、言語に基づく民族的区分も多様となる。チェチェン語とイングーシ語は北カフカース語派のナフ語群に含まれる。両言語の差は方言程度といわれている。チェチェン人とイングーシ人は両方合わせて「ヴァイナフ（Вайнах）」と呼ばれている。ヴァイナフ



地図 チェチェン・イングーシ (出典: Hughes, 2007, xi)

とはナフ語を話す人々という意味で、チェチェン人もイングーシ人も元来ヴァイナフという一体感を持っていた。チェチェン人とイングーシ人に分化したのは、帝政ロシアおよびソ連の民族政策の結果であった。もともとチェチェンとイングーシは村の名称であり、17世紀に当地に進出したロシア人によりそれらの村の名前に因んで命名された<sup>3</sup>。その後の帝政ロシアによる植民地支配とソヴィエト政権により、両民族は固定化され、それぞれのアイデンティティを発展させた。

ソ連の民族政策は民族を構成単位とする連邦制であり、チェチェンとイングーシは自治地域を持つことができた。1922年にチェチェン自治州、24年にイングーシ自治州が形成された。34年に両自治州が合同し、チェチェン・イングーシ自治州を形成した。36年にはチェチェン・イングーシ自治ソヴィエト社会主義共和国に格上げされた。しかし、44年にチェチェン人とイングーシ人は対ドイツ協力を理由に、中央アジアへ強制移住させられ、チェチェン・イングーシ自治共和国は廃止された。その後、57年に名誉回復がなされ、自治共和国が再建された。両民族は再び祖国の地へ帰還を許されたが、そ

の期間に入植した他民族との関係の悪化、国境の変更による領土問題を抱えることになった。

ソ連は民族自治による連邦制国家であったが、これは形式的なものであり、実質的にはソ連共産党による中央集権的な一党支配体制であった。チェチェン・イングーシ共和国共産党の第一書記は常にロシア人であり、ロシア人による支配は帝政期から続いていたと言えるだろう。しかしながら、1980年代後半、ソ連共産党書記長のゴルバチョフ（Михайл Горбачёв）によるペレストロイカが開始されると、各地域において共産党支配から脱却しようという試みがなされた。チェチェン・イングーシにおいても自由化の動きは共産党の民族化（チェチェン化・イングーシ化）から始まり、共和国における主権宣言、最終的にはロシアからの独立にまで要求は発展した。

本稿では、チェチェン民族主義運動のはじまりからチェチェン革命へ至る道程を考察の対象としている。その過程は民族主義運動の形成とその急進化であった。まず、脱共産化の過程をチェチェン・ナショナリズムという観点から考察する。次に、チェチェン民族主義運動の始まりからチェチェン革命に至る歴史を概観する。そして、ドゥダエフ（Джохар Дудаев）体制の確立から崩壊過程を検討する。最後にナショナリズムと革命という視点からまとめをしてむすびとしたい。

なお、資料的な制約があり、本稿では事実関係の考察や分析を十分に行うことができなかった。チェチェン・イングーシに関する著作が少ないため、本稿では英語の著作を参照しながら、ロシア語での著作、パンフレット、インターネット上の情報などを使用した。ウェブには、重要だと思われる情報が数多く見られると同時に、正確さを欠いている情報も含まれている。ウェブの情報の利用が有益かつ危険であるということは周知の事実であり、これらの情報を使用するにあたり、その正確性を検討する作業が必要となる。本稿で使用したウェブの情報についてはいくつかの資料と重ね合わせて事実関係を検討したものではあるが、すべてにおいて十分に検討し尽くされているわけではない。こうした理由により、筆者は本稿を研究ノートとして提示したい。

## 2. 脱共産化過程におけるチェチェン・ナショナリズム

### (1) エスニック・ナショナリズムの認識対照システム (ethnic nationalism's system of cognitive contrasts)

ペレストロイカからチェチェン革命までの時期にチェチェン人が経験したのは共産主義イデオロギーからの脱却であった。政治システムとイデオロギーの関係は補完的であり、たとえイデオロギーが形骸化してきてもシステムが存在し機能している限り、イデオロギーから自由になることができない。脱共産化とは共産主義イデオロギーと共産主義的システム（ソ連の場合、共産党による支配体制）が崩壊し新たなものに置き換えられて初めて完結する<sup>4</sup>。ただ脱共産化といってもその方向や程度は一樣ではなく、歴史的経験や経済発展状況、西欧思想の影響の多寡などにより多様なものとなる。ここでは、脱共産化のおおまかな流れをつかむため、一つの認証システムを紹介する。

それは中東および中央アジアの地域研究者のヘラツトヴェイト（Daniel Heradstveit）がカフカースおよび中央アジアにおける対照マーカーに着目して考案したものである。これらの地域において、

エスニック民族主義者のイデオロギーには、際だった対照を生み出すための二つの戦略が見つけられる。第一は、特定の集団の特徴としてエスニック・マーカーを強調することである。第二は、共産主義システムからの距離を強調するものである。前者はナショナリズムの強さを作り出し、後者はその方向性を誘導する。チェチェン・ナショナリズムが極めて原初的な特徴を示すのは、後者の方向性にに基づいている<sup>5</sup>。表1は、認識対照システムにおける政治的目標を列挙したものである。これらはそれぞれの理想的要素として具体的に表象されるものである。したがって、必ずしもこれだけに限るものではなく、状況と場面において、他のイメージや考え方が表象される場合もある。ただ表象されやすい要素は、対象として際立っているほうがよいとされる。

表1 エスニック・ナショナリズムの認識対照システム

共産主義の理想的要素	エスニック・ナショナリズムの理想的要素
利害（同じ利害を持つ）共同体	血の共同体
同志	兄弟
社会運動	家族・親族
普遍主義	排他主義
目標合理性	価値合理性
近代性	伝統主義
可動性	永遠性
抽象的な敵のイメージ	具体的な敵のイメージ
経済的な価値	感情的な価値
国際主義	愛国主義
都市	ゆかりのある土地
非宗教的	宗教的
変動	安定
物質主義	無形（実態のない）価値
私たちは一様だ	私たちは一様でない

（出所：Daniel Heradstveit, 1998, 385）

ヘラットヴェイトによれば、共産主義においては、人的なつながりが「同志」であったのに対し、エスニック・ナショナリズムでは、「親類縁者（kith and kin）」となる。これは、血族関係の拡大に基づく団結である。集団の行動様式は家族的なパラダイムによって浸透させられ、血族関係の規範や義務は、集団全体に広がる。こうした家族的パラダイムは、領土と密接に関係し合い、イデオロギー化された状況において、諸価値や政治的決定にある種の指針を与える。唯物論を基礎に置いた共産主義の団結の理想は、こうした血族関係に基づく団結と際だった対照をなしている。

家族的パラダイムに基づく血族関係は近く、一体的であると同時に、集団の外側の人々や集団とは常に距離が保たれる。エスニック民族主義者はエスニック・グループ間のほんの小さな違いですらあげつらい、これらを差別的な取り扱いの根拠にする。研究によれば、エスニック・アイデンティティは極端に恣意的で疑わしい特質の下に築かれることが示されている。選択的知覚のような心理学的な仕組み、神話や全くの空想は、他の諸集団との類似を最小化し、差異を誇張しながら、できるだけ対照を際立たせるように使用される<sup>6</sup>。

エスニック民族主義者が伝統社会に関係するこれらの諸価値を重視しているのは、必ずしも、伝統的な社会を作り出したいというのではなく、むしろ、伝統社会に関連する諸価値が象徴的な意味を持ち、人々を動員する手助けとなるからである。この意味で、エスニック民族主義者のこれらの価値の運用の仕方は、極めて、戦略的、道具的、合理的であると言えよう。

彼はこの象徴的諸価値に基づくエスニック・ナショナリズムがイデオロギーとして機能したとしている。指摘したとおり、エスニック・ナショナリズムの理想的要素はそれぞれに関連づけられて提示されていない。エスニック・ナショナリズムは脱共産主義の過程で、ある種の信条体系 (belief system) としてイデオロギーの機能を果たすことになるのである。

## (2) チェチェン・ナショナリズムの基盤

ヘラツトヴェイトの「エスニック・ナショナリズムの理想的要素」を見ると極めて原初的で前近代的な項目が羅列されている。これは脱共産化の過程で脱共産主義イデオロギーという強い誘因力がこれら原初的傾向を生み出したと考えられる。すなわち、脱共産化の過程が進行することで原初的な絆や価値観への回帰が始まり、最高点に達したのち収束に向かうのである。おおまかに言えば、ナショナリズムによる原初的回帰は90年代前半を通じてチェチェン人民を支配した。

チェチェンでは現地宗教や伝統と競合しスンナ派イスラムは深く根付くことはなく、のちにスーフィズム (イスラム神秘主義) に取って代わられた。スーフィーの二つのタリーカ、ナクシュバンディー教団とカーディリー教団が宗教生活を支配した。1877年～1917年革命の間にはチェチェン・イングーシの成人人口のほぼ全部が両教団のいずれかに属していた。ソヴィエト期でさえチェチェン人とイングーシ人の大多数がムリード (弟子) となり教団に入会していた<sup>7</sup>。90年代前半の政治変動はチェチェンにおける宗教の状況を一変させた。90年春、「イスラムの道」党 (партия “Исламский путь”) <sup>8</sup>が結成され、91年には最初のイスラム大学が設立された。宗教財産の没収解除の命令がなされ、94年までにモスクは約400になった。ムスリム世界との接触も徐々に復活し、アラビア語とイスラム法 (シャリーヤ) を学習するため学生たちがエジプトやヨルダン、サウジアラビアに派遣された。

他方、カーディリー教団は民族主義運動ともにチェチェン革命～ドゥダーエフ政権の成立に貢献した<sup>9</sup>。特に人的動員力は他の組織を圧倒していた。ドゥダーエフは伝統的にチェチェンで活動してきたカーディリー教団の支援を受けながらも、イスラムが政治化しないように注意を払っていた。92年の憲法ではチェチェンは世俗の民主主義国家と宣言されている。実際にイスラムが政治化してくるのは

ロシアの介入の脅威が迫る94年であり、その後ドゥダーエフとカーディリー教団との蜜月時代も終わる。ドゥダーエフが暗殺された96年以降、急速にワッハーブ派の影響が拡大する<sup>10</sup>。

もう一つはタイプ（тейп）と呼ばれる氏族共同体の存在である<sup>11</sup>。チェチェン・イングーシには、おおよそ100以上（一説では150ぐらい）のタイプが存在すると言われている。タイプの構成単位を見ると、タイプは数十のガル（гар 血統集団）<sup>12</sup>から成り立っており、ガルは数十のネク（некъе 拡大家族）、ネクは最小単位のドーザル（дoъзал 核家族）からなっている。タイプには「アダト（адат / Тадат）」という日常生活のあらゆる面を規定する法規範があり、商法、民法、刑法を兼ねた法典の役割を担っていた。また年長者（長老）会議が置かれ、政治的首長や軍事的指揮者をもっていた。ある一定の地域のタイプは一つに集合し、トゥフム（тухум 部族）<sup>13</sup>を作っている。トゥフムはチェチェンおよびイングーシの社会制度の頂点に立つ組織である。トゥフムにはタイプ間の係争の審議や調整のために協議機関「メフク・クヘル（Мехк-кхел）」をもっていた。現在チェチェンには、九つのトゥフムが存在すると言われる。それらは、アッキ（Аккий / Аьккхий）、ミヤルヒ（Мялхий / Маьлхий）、ノフチマフカホイ（Нохчмахкахой / Нохчмахкахой）、テルロイ（Терлой / ТPerлой）、チャンティ（Чангий / Чаьнтгий）、チェバルロイ（Чебарлой / Чебарлой）、シャロイ（Шарой / Шарой）、シャトイ（Шогой / Шуотой）、エルシュトホイ（Эрштхой / Эрштхой）である<sup>14</sup>。

こうした伝統的な社会制度は近代化や都市化の進行とともに形骸化が進んでいった。現在ではタイプは社会集団として存在しているのではなく、程度の差はあっても社会的アイデンティティとして重要な存在となっている。つまり、民族的シンボルや内集団と外集団を識別する特徴となったのである。現在のタイプのアイデンティティは家族的アイデンティティとエスニック的アイデンティティの特殊な混合物と見なすことができよう<sup>15</sup>。

### 3. チェチェン・イングーシ民族主義運動

#### (1) 1980年代のチェチェン・イングーシ

チェチェン・イングーシ自治共和国において、80年代を特徴づける政治状況として、①イデオロギー的統制の強化、②党と国家機関におけるロシア化の継続を挙げることができるだろう<sup>16</sup>。まず前者についてであるが、80年代初め、ソ連邦構成共和国ではスースロフの指導により、ロシアの一部への「自発的加入（добровольный вхождение）」記念祭の祝賀キャンペーンを実施された。グロズヌイでは、82年、ソ連共産党チェチェン・イングーシ州党委員会第一書記ヴラソフ（Александр Власов）の指導により「チェチェン・イングーシのロシアへの自発的加入200周年」の記念日が祝われた<sup>17</sup>。

この「ロシアへの自発的加入」の概念はチェチェン・イングーシの文化人類学者のヴィノグラドフ（Виталий Виноградов）により練り上げられた<sup>18</sup>。彼はチェチェン・イングーシが80年にもわたってロシアからの解放闘争を行ってきたことを否定し、チェチェン人とイングーシ人を独立した歴史的発展能力を欠く「反動的民族」であるとした。これに対しチェチェン・イングーシの歴史家のグルー

ブは、「自発的加入」の概念とヴィノグラドフと彼の同調者の活動における歴史的偽造に対し激しい批判を浴びせた。しかしながら、党機関と共和国国家保安委員会により組織された、「自発的加入」概念の批判者に対する弾圧が80年代中頃まで続いた<sup>19</sup>。

次に、80年代の共産党における現地人化の様子を概観する。自治共和国における共産党最高機関である州党委員会（オブコム、обком）では、他の地域では現地人化が進行し、自治共和国の代表である第一書記は現地民族から選出されることが一般的であった。こうした中でチェチェン・イングーシは極めてまれなケースであり、ロシア人の支配体制が続いていた。リウキン（Michael Rywkin）によると、85年12月選出のチェチェン・イングーシ州党委員会では、第一書記がロシア人のフォチェエフ（Владимир Фогеев）、第二書記がチェチェン人のザヴガエフ（Доку Завгаев）、そして3人の書記の一人はロシア人であった。党ビューローは、ロシア人が7人、現地民族6人でロシア人が多数を占めていた。党委員会の11の部局のうち、6部局（党機関、行政、総務、財務、建設、科学・教育）にはロシア人が就き、残りの5部局（宣伝・煽動、文化、石油化学産業、軽工業・消費財）は現地民族であった。州党委員会全体では、委員約100人のうち現地民族は53人という数字が挙げられている。これに対し、隣国のダゲスタンの同委員125名中、約28名が非現地人（ロシア人、ウクライナ人、アルメニア人）であった<sup>20</sup>。

## (2) チェチェン・イングーシ人民戦線

1985年3月に共産党書記長になったゴルバチョフは86年から本格的な改革「ペレストロイカ（建て直し）」を開始する。経済改革や外交政策の転換が先行する中、政治改革は88年頃から本格化する。共和国レベルの民族運動は88年頃から高まり始め、各地でペレストロイカの政策を支持する人民戦線運動を生み出した。

そのきっかけとなったのは環境問題であった。当時、共和国西部の主要都市グデルメスに生物化学工場が建設されることとなった。地元の建設技師であるエズブラトフ（Руслан Эзблатов）は、工場で生産される化学物質が地元住民の健康を損ねると主張した<sup>21</sup>。こうした主張は徐々に工場の建設中止を求める抗議行動となった。88年春<sup>22</sup>に地域住民の間の集会から生まれたのが、「チェチェン・イングーシ緑の運動（Зелёное движение Чечено-Ингуштии）」（以下、緑の運動）であった<sup>23</sup>。このように環境問題に対する異議申し立てが政治的煽動に発展するのはペレストロイカ期の典型であった。ソ連邦の諸民族は、弱体化したソヴィエトの国家構造に対抗するため、国民運動の枠内で人びとを動員しながら、より多くの自治を要求しはじめたのである。

人民戦線の活動も緑の運動と同様、グデルメス市における生物化学工場の建設計画に反対する自然発生的集会の結果生まれた。88年5月29日、グローズヌイで環境に関する集会が開かれた。そして環境問題に関する社会委員会（14人以上）が設立された。当初は「ペレストロイカ支持同盟（Союз содействия перестройки）」（以下、ペ同盟）として88年6月に結成された。ペ同盟の目的は、民主化、スターリン主義とそれが残した後遺症の撲滅、共和国におけるペレストロイカの支援であった。

88年7月2日、グローズヌイの都市住民が参集した集会で次のことが要望された。それは、グデルメスの生物化学工場の建設を中止すること、地方政府の側からペ同盟のメンバーへのつきまといを止めること、ペ同盟のメンバーへの施設と大衆情報媒体の利用について便宜を提供することであった。88年7月10日と17日、諸都市では再びペ同盟により組織された環境問題に関する集会が行われた。続く、88年7月24日と8月7日には、大衆による街路示威行動も首尾よく実施された。88年8月、ペ同盟は「チェチェン・イングーシ自治共和国人民戦線（Народный фронт ЧИАССР）<sup>24</sup>」（以下、「人民戦線」）と改称した。「人民戦線」の動員は順調に拡大し、89年の5月から7月までの集会において総計50,000人以上が参加した<sup>25</sup>。この運動も当時ソ連全域で活動していた各地の人民戦線運動と同様、「人民戦線」のメンバーも主に知識層からなっており、現地のロシア人も相当数含まれていた<sup>26</sup>。

「人民戦線」の目標は穏健なものであった。第一は、グデルメス市に生物化学工場を建設するという計画に反対する。第二は、宗教の自由と、チェチェンとイングーシの言語および文化の保護を要求する。第三は、強制移住<sup>27</sup>に関する記念、移住者に対する名誉回復と十分な補償を要求する。第四は、チェチェン・イングーシが自発的にソ連に加盟したというような政治的に公式化された歴史的文言の使用をやめることを要求する、というものであった<sup>28</sup>。

### (3) ザヴガエフ政権

「人民戦線」により組織化された抗議は、州党委員会の第一書記にチェチェン人の任命を要望していたチェチェン人の共産党上層部と共和国保安委員会、警察組織に支持された。89年4月、州党委員会第一書記のフォチェエフはソ連人民代議員に選出され、中央へ異動した。州党委員会ビューローは第二書記で農業問題に従事していたザヴガエフ<sup>29</sup>を第一書記に選出した。ザヴガエフの第一書記への就任は、自治共和国住民はもとより「人民戦線」を始めとする政治活動グループの指導者たちにも歓迎された。というのは彼が共和国の指導者の地位を得た初めてのチェチェン人だったからである。そして自由化の季節が到来した。共産党組織や国家保安委員会においてイデオロギー的強制が緩和され、非公式組織の活動の自由が制限的ではあるが認められた。また独立系の新聞や雑誌が発刊され始めたのもこの頃からである。80年代にチェチェン・イングーシのイデオロギー機関を支配していた保守的なチェチェン人知識人が退場し、新たに民族利益を代表する知識人が出現した。このように共和国の党指導部が一新されると、民衆の目は各地域の指導部に向かった。チェチェン・イングーシでもソ連の他の地域と同様汚職や政治的腐敗が蔓延していた。90年初頭、汚職追放を訴える大衆運動やハンガー・ストライキなどの抗議行動の下、各地区の主要な書記が更迭されたり辞任に追い込まれたりした<sup>30</sup>。そして、90年にはグローズヌイ党市委員会を除きすべての重要ポストがチェチェン人とイングーシ人に置き換えられた<sup>31</sup>。

チェチェン・イングーシの政治生活における非ロシア化、現地民族化の進展は、チェチェン・イングーシのナショナリズムを高揚させた。90年3月、チェチェン・イングーシ自治共和国でロシア共和国人民代議員選挙とチェチェン・イングーシ自治共和国最高会議議員選挙が行われた。チェチェン・



イングーシ選出のロシア共和国代議員の多数は事実上「民主ロシア」連合に参加した。首都グロズヌイ地区ではハズブラトフ（Руслан Хасблатов）が地元共産党保守派のリーダーと目されていた州党委員会第二書記でロシア人のグロモフ（Павел Громов）を破り当選した。同時に実施された自治共和国最高会議には基本的には従来どおり共和国共産党および企業家の代表が選出された。しかし、独立系の候補者も最高会議議員に選ばれた。「民主主義イニシアチヴ（Демократическая Инициатива）」と「主権（Суверенитет）」が反対会派を結成した<sup>32</sup>。同じく当選したハジエフ（Саламбек Хаджиев）はソ連邦石油化学産業相に就任した。チェチェン人がソ連邦の閣僚となったのも初めてであった。ザヴガエフは最高会議議長に就任し、党と国家双方の指導者の地位を占めた。

90年半ばには後述するとおり、チェチェン民族主義運動が急進化する。その圧力に押される形で、90年10月27日、チェチェン・イングーシ自治共和国最高会議は、チェチェン・イングーシ共和国国家主権に関する宣言（主権宣言）を行った。そして、今後は主権国家として平等を基礎に同盟および連邦条約を調印するとした<sup>33</sup>。

#### （4）チェチェン民族大会

ゴルバチョフのペレストロイカを支援するために生まれた「人民戦線」の活動は、ペレストロイカを支持する共産党の改革派を支持してきた。ザヴガエフ政権が誕生した今「人民戦線」の歴史的役割も終了した。90年春から新たな政治勢力として現れたのは、ヴァイナフ民主党<sup>34</sup>（以下、民主党）であった。民主党はチェチェン人の民族主義的組織で、ヤンダルビエフ（Зеливхан Яндарбиев）<sup>35</sup>が指導者の一人であった。当初ザヴガエフ政権の体制内改革派として活動を始めた民主党であったが、90年秋には主要な反対派になっており、公然と共和国指導部の方針に異を唱えていた。民主党の主たる目的は、ソ連の構成国家として主権を持つヴァイナフ共和国を確立することであった。党綱領では、共産党による人事に反対し現地民族を優先して登用すること、伝統的な共同体会議「メフク・クヘル」を復活させること、宗教的再興、ロシア語住民のチェチェン・イングーシ自治共和国への「人工的移民」の中止、などの項目が挙げられていた。

90年夏、チェチェン知識人の著名な代表者グループは民族的な文化・言語・伝統・史跡の再興の問題に関する審議のためチェチェン民族大会（Чеченский национальный съезд）の開催を求めた。これら民族的急進者が提示した「民族的再興」というスローガンを自らのものにしようとして共和国政府はこの発議を支持した。大会の組織委員会代表となったのは、共和国人民代議員であり、議会の反対会派「主権」の指導者でもウムハエフであった。彼は、共和国指導部の中で自由主義・改革主義者に近い立場を取っていた。90年11月23日～25日、第1回チェチェン民族大会がグロズヌイで開催され、大会の執行委員会委員が選出された。また大会ではチェチェン共和国の主権、チェチェン民族の言語・文化・歴史的記憶の再興について決議がなされた。12月1日、第1回の執行委員会で、議長にソヴィエト空軍少将のドゥダエフ<sup>36</sup>、第一副議長に共和国代議員のウムハエフ、副議長にヴァイナフ民主党首ヤンダルビエフ、委員にヴァイナフ民主党のソスランベコフ（Юсуп Сосламбеков）が

選ばれた。委員会指導部はドゥダーエフをお飾り的な地位に据え、穏健派のウムハエフと急進派のヤンダルビエフというようにバランスを取った構成となっていた<sup>37</sup>。

11月27日に開催された共和国最高会議は、チェチェン・イングーシ共和国が主権国家であることを宣言し、今後は主権国家として平等を基礎に同盟および連邦条約を調印するとした<sup>38</sup>。これは前日のチェチェン民族大会における「チェチェン共和国の主権に関する決議」を受ける形でなされた。その後、ヴァイナフ民主党とそれに近い民族急進的組織（緑の運動、復興イスラム党（Исламская партия возрождения）、「イスラムへの道」党（“Исламский путь”）、「カフカース」協会（“Кавказ”）は「チェチェン人民全民族運動」ブロック（блок “Общенациональное движение чеченского народа”）を結成した。このブロックの目的は、①「人民主権」の実現化、②チェチェン・イングーシのロシア共和国からの脱退であった。補足すると、前者は党官僚によって独占されてきた主権を人民のものとするという意味であった。他方、後者の「脱退」は構成体としてロシア共和国から脱退するというもので、「分離」または「独立」を想定していたわけではなかった<sup>39</sup>。

91年春、チェチェン民族大会執行委員会では穏健派と急進派との間で改革の進度をめぐり闘争が始まった。ドゥダーエフは事実上権限をもたない名誉的な議長職を与えられたと思われていたが、ソヴィエト軍を3月に退役し、自ら執行委員会の職務を率先して行うようになった。ウムハエフが率いる穏健派は要職から解任された<sup>40</sup>。91年5月25日、ドゥダーエフは、共和国最高会議がチェチェン・イングーシ共和国の主権に関する宣言を採択したことに関し、すでにその正当性が失われていること、全権を与えられたチェチェン人民によって統一された立法機関は、それ自体が執行機関の機能を合わせもつ用意のあるチェチェン民族大会執行委員会であると発表した<sup>41</sup>。91年6月8日～9日、第1回チェチェン民族大会第2会期が開催された。開催を主導したのは民族急進派であり、自派をチェチェン人民全民族会議（Общенациональный Конгресс чеченского народа (ОКЧН)）（以下、「全民族会議」）とすることが宣言された。会議は共和国最高会議の廃止に関する決定を採択し、ノフチ=チョ・チェチェン共和国の樹立を宣言した。政府の臨時機関としてチェチェン人民全民族会議執行委員会（議長ドゥダーエフ）が代行することも宣言された。ウムハエフら穏健派のグループはチェチェン民族大会およびチェチェン人民全民族会議の執行委員会からの脱退を届け出た。この結果、執行委員会は民族急進派で占められ、第一副議長にソスランベコフ、副議長にヤンダルビエフとアフマドフ（Хсейн Ахмадов）<sup>42</sup>が就任した。

#### (5) チェチェン革命<sup>43</sup>

1991年8月19日～21日のモスクワにおけるソ連保守派のクーデターとその失敗はチェチェン・イングーシにおける社会的・政治的緊張を助長させることとなった。大衆運動を組織し指導していったのはドゥダーエフが率いる全民族会議であった。9月1日～2日、第1回チェチェン民族大会第3会期では共和国最高会議の廃止が宣言され、チェチェン領内のすべての権力を全民族会議執行委員会に引き渡すとした。この時期全民族会議執行委員会はグローズヌイを含め数地区の状況を事実上掌握して

おり、共和国最高会議との関係は緊迫していった。9月6日、同執行委員会の同調者で武装したグループは最高会議が開催される政治教育会館を占拠し議員団を追い払った。執行委員会は臨時政府としてマモダエフ(Яраги Мамодев)を長とする国民経済複合体労働管理臨時委員会(Временный комитет по контролю за работой народхозяйственного комплекса)のち、国民経済運営管理委員会(Комитет по оперативному управлению народным хозяйством, КОУНХ)を設立した。

9月15日、ロシア共和国最高会議第一副議長のハズブラートフがチェチェン入りし、彼の監督下で共和国最高会議の最終会期が挙行され、自主解散に関する決定がなされた。ハズブラートフと全民族会議執行委員会指導部との交渉の結果、選挙(10月17日に決定)までの間の臨時政府として、臨時最高会議が創設された<sup>44</sup>。議長には全民族会議執行委員会副議長のアフマドフが、副議長にはハズブラートフの協力者でチョールヌイが選ばれた。10月になると、臨時最高会議の中で全民族会議派とその反対派との対立は深まっていく。その中でアフマドフは臨時最高会議の総意として全民族会議執行委員会を最高権力機関とするための法的基盤となる一連の法律や政令を公布した。他方、10月1日には、ロシア共和国最高会議でチェチェン・イングーシがノフチ=チョ・チェチェン共和国とイングーシ共和国とに分離し、イングーシ共和国がロシア共和国の一部となると宣言された。10月5日、臨時最高会議議員9名のうち7名がアフマドフの解任と彼が主導した一連の法令の取り消しの決定を採択した。同日、全民族会議派の武装部隊は臨時最高会議の労働組合会館と共和国国家保安委員会ビルを占拠した。10月6日、全民族会議執行委員会は臨時最高会議が爆破および煽動活動に賛成したという理由で同会議の解散を宣言した。そして、全民族会議執行委員会が選挙までの移行期におけるすべての完全な権力を掌握する革命委員会の機能を引き受けるとした。

こうしてチェチェン・イングーシにおいて二つの権力が並立することとなった。一つは全民族会議執行委員会と臨時政府、もう一つは臨時最高会議であった。最高会議は10月7日定数を規定の32人に戻し活動を再開することを決定した。議長には法学者のバフマドフ(Бадруддин Бахмадов)が選ばれた。この時期になると反全民族会議派(反ドゥダエフ派)が形成され、臨時最高会議を支持した。グローズヌイではチェチェン・イングーシの保持に賛同する連立的「運動」が結成された。また「人民義勇軍」という武装部隊も組織された。この名前は全民族会議派が武装部隊を「民族親衛隊」と称したのに対抗したものであった。緊張が高まる中、10月27日、全民族会議執行委員会はチェチェン共和国の大統領と議会の選挙を敢行した。選挙の結果、チェチェン共和国の大統領には執行委員会議長のドゥダエフが選ばれた。

臨時最高会議とその支持者は選挙結果が偽装されたものであるとして、その結果の承認を拒否した。チェチェン・イングーシ共和国の閣僚会議(内閣)、企業や官庁の要職者、各地区の指導部も選挙の結果を認めなかった。しかし、ロシア共和国エリツィン大統領の対応はチェチェン情勢を一変させた。11月7日付の大統領令<sup>45</sup>では、非常事態・夜間外出禁止令をチェチェン・イングーシに導入することを決定し、内務省部隊の現地派遣が指示された。非常事態宣言の導入に際し、ドゥダエフの反対党や反対運動の指導者たちは、ロシアではなく、チェチェン共和国の主権の防御という使命を持つ大統領

領と議会の支持を表明した。臨時最高会議とその武装部隊である人民義勇軍は最初の数日間で崩壊した。チェチェン・イングーシ共和国は、全民族会議派によるチェチェン革命の結果、チェチェン共和国とイングーシ共和国とに分離することが明確になった。

## 4. ヴァイナフ主義とチェチェン主義・イングーシ主義

### (1) ヴァイナフ主義

ザヴガエフはチェチェン国家ではなく、ヴァイナフ国家の樹立を目指していた。本稿の冒頭で述べたとおり、「ヴァイナフ」というのはチェチェン人とイングーシ人の両方を含んだ総称である。ヴァイナフというのは、ナフ語を話している人々、すなわち「私たちの人々」という意味である。チェチェン語もイングーシ語もナフ語に属し、その違いは方言程度と言われる。ロシアはこの地域を植民地化した後、方言に基づいてヴァイナフを二つの異なる人々、チェチェンとイングーシに分割した。

名称が異なる両民族は、ソ連邦においてそれぞれに自分たちのアイデンティティを確立しつつ、両民族が共有しているアイデンティティも保持した。両民族への決定的に分化を促さなかった理由は、ソ連における政策が常に「チェチェン・イングーシ」を一つの構成体として取り扱い、両民族が自治共和国の廃止、強制移住、自治共和国の再建など歴史を共有してきたことに求められよう。他方で社会的な形成過程において民族的な連携を基礎とした小規模な共同体を基盤としていたため、「ヴァイナフ」という概念は数百もの共同体（タイプ）を入れる箱の役割を歴史的に果たしてきた。ザヴガエフがこうしたヴァイナフ国家の確立を要求していったことはある意味当然のことであったと言えよう。そして、自治共和国の地位を連邦共和国へ格上げするよう要求し始めた。そのため、90年6月12日のロシア国家主権宣言にザヴガエフは賛成投票をしなかった<sup>46</sup>。

ザヴガエフがヴァイナフ国家を確立しようとしていた証左は隣国をめぐる次の二つの領土問題の事例から読み取れよう。一つは北オセチアの一部になっているプリゴロドヌイ地区の返還である。1944年、チェチェン・イングーシ自治共和国が廃止されると、イングーシ人の居住地域は北オセチア自治共和国とスタヴロポリ地方に分割された。57年チェチェン・イングーシ自治共和国が再建されたが、オセット人が多く移住したヴラジカフカース南郊のプリゴロドヌイ地区はそのまま北オセチア領内に残された。ザヴガエフはこの地区に対する返還要求をことあるごとに要求した<sup>47</sup>。また、前述したチェチェン・イングーシ自治共和国の主権宣言には、イングーシの領土であるプリゴロドヌイ地区が返還されるまで同盟および連邦条約に調印しないという留保条件が付されていた<sup>48</sup>。

もう一つはダゲスタンのアウホイ地区におけるチェチェン・アッキ人の居住地域の再建である。アッキというのはチェチェン社会における氏族共同体タイプの一つである。チェチェン・アッキ人はチェチェンとダゲスタンの低地に居住し、総数は7～8万人といわれる。強制移住の直前の43年、ダゲスタンとチェチェンの国境沿い（ダゲスタン側）にチェチェン・アッキ人居住区としてアウホイ地区が設立された。翌年の強制移住によりアウホイ地区はノヴォラク地区に改称され、その一部はカズベク

地区に編入された。ノヴォラク地区には主にラック人が、カズベク地区へ編入されたところにはアヴァール人が移住した。ザヴガエフはチェチェン・アッキ人のためにアウホイ地区の再建の要求もプリゴロドヌイ地区の返還と同様主張し続けた<sup>49</sup>。

ザヴガエフのヴァイナフ主義はいわゆるペレストロイカの「歴史の見直し」と合致した、妥当な要求であった。ソ連邦およびロシア共和国との関係についても政治的、法的手続に則ったものであった。ヘラツトヴェイトによる認識対照システムの項目を見ても、彼の政策には「利害共同体」「目的合理性」「近代性」「経済的な価値」という要素が含まれていると考えられ、必ずしもエスニック的な要素ばかりではなかった。

## (2) チェチェン主義・イングーシ主義

ザヴガエフのヴァイナフ主義に対し、ドゥダーエフは常にチェチェン民族にこだわって運動を続けてきた。ドゥダーエフがチェチェン民族大会執行委員会の議長職に就くことができたのは、彼がソヴィエト空軍少将の地位まで上り詰めた、チェチェン人の英雄であり、チェチェン民族運動の象徴として最適だと民族大会指導部が判断したことによるものであった。1991年春以降、指導部の意に反し、ドゥダーエフが執行委員会を指揮し始めてから民族大会は急進的となった。まず穏健派が執行委員会から排除され、次いで共和国最高会議が採択した主権宣言を無効とした。そして、ノフチ=チョ・チェチェン共和国の樹立が宣言されるに至った。両宣言の対象を比べると、前者がチェチェン・イングーシを対象としているのに対し、後者はチェチェンそのものを対象としている。「ノフチ=チョ」はチェチェン語でチェチェン人自身を指す。さらに共和国の樹立はそのままソ連邦とロシア共和国からの分離・独立を意味していた。そしてナショナリズムの対象は、ヴァイナフ（チェチェン・イングーシ）からノフチ=チョ（チェチェン）へと移った<sup>50</sup>。ザヴガエフからドゥダーエフに権力の重心が移るにつれて、イングーシの対応も変化していった。チェチェン・イングーシ共和国から分離し、ロシア共和国内に止まることを選択した。

この時期のイングーシの民族運動は自治復活と領土回復に支配されていた。イングーシ・ナショナリズム（イングーシ主義）の登場である。北オセチアのプリゴロドヌイ地区の返還を求めるためには、ロシアにとどまる必要があった。チェチェンが単独で独立を志向すれば、ロシアにとどまろうとするイングーシと分離せざるを得ない。そうなれば、両者の国境はチェチェン人とイングーシ人の混住地帯を分断することになるであろう。今度は両者の間に領土問題が派生するのである。民族にとって領土は強力なアイデンティティを引き起こす要素である。イングーシは領土回復を梃子に民族運動を加速させ、自治を復活させようとした<sup>51</sup>。

ドゥダーエフのチェチェン主義はザヴガエフのヴァイナフ主義に比べ共産主義からの距離が大きい。前述のエスノナショナリズムの認識対照システムを参照すると、「血の共同体」「排他主義」「伝統主義」「感情的な価値」「愛国主義」「ゆかりのある土地」「無形価値」など原初的要素がチェチェン主義の基盤となっていることがわかる。

## 5. ドゥダーエフ体制の成立と崩壊

### (1) ドゥダーエフ体制の特徴と反対派の形成

1991年11月～12月、チェチェン共和国政府の主要機関が創設された。ドゥダーエフは11月9日に大統領の宣誓を行い、同時に軍総司令官と首相（閣僚会議議長）となった。11月2日、チェチェン共和国議会<sup>52</sup>で初めての会期が開かれた。議長にはアフマドフ、第一副議長にはメジドフ（Бек Межидов）<sup>53</sup>、副議長にはグシャカエフ（Магомед Гушкаев）<sup>54</sup>が選ばれた。92年3月12日、共和国議会は「チェチェン共和国は、チェチェン人民の民族自決の結果成立した、主権独立民主主義的法治国家である」という宣言に従い、チェチェン共和国憲法を採択した。

表2は、1991年、発足当時におけるドゥダーエフ政権の主要メンバーの基本データである。議会の主要ポストはほぼ全民族会議派によって占められた。内閣は二つの段階を経て形成された。最初に、91年10月から92年5月までは、外務、情報・出版など主に政治的分野の省が作られた。経済的分野に関しては、マモダエフを長とする国民経済運営管理委員会であり、経済諸官庁を統轄した。その後、92年5月、国民経済運営管理委員会が解体され、経済関係の省が作られた<sup>55</sup>。ここでは、旧来の経済・行政エリートが退場し、ビジネス世界の新しい代表者と影響力を持つ経営指導者が閣僚ポストに就いた。もう一つ、政府の重要な機関として、大統領府がある。その中で最も影響力があったのは、大統領顧問（外国経済活動担当）で企業家のウツィエフ（Руслан Уциев）であった。彼はチェチェン政府の石油や石油製品の貿易関係を含むすべての対外経済活動に従事していた。

92年夏、政府内では、第一副首相のマモダエフと大統領顧問のウツィエフのそれぞれが率いるグループの間で政策の食い違いが露わになってきた。両者は、石油産業と石油製品取り引きの支配をめぐる闘争で競り合っていた。両者の争いは、市場経済の導入やロシアとの関係正常化といった経済や外交上の重要な課題で対立している政府内のグループにも影響を与えた。その結果、政府はおおよそ二つのグループに分かれることになった。一方は実利主義者と呼ばれるグループで、市場改革の推進やロシアとの関係正常化の必要性を認めていた。このグループには、マモダエフ第一副首相、ベノ（Шамиль Бено）外相、ヤンダロフ（Андарбек Яндаров）教育相、シャハボフ（Висхан Шахабов）参謀長らがいた。もう一方は、急進派と呼ばれ、大統領権限の強化、政治的反対運動の禁止、検閲の引き締め、ロシアとの対決に賛同するグループであった。この方針に同調したのは、ウドゥゴフ（Мовлади Удугов）情報・出版相、ウツィエフ大統領顧問、シェリポヴァ（Элиза Шерипова）検事総長、アルバコフ（Султан Албаков）保安相、アルサヌカエフ（Илес Арсанукаев）民族親衛隊司令官たちであった<sup>56</sup>。

政府の外においてもドゥダーエフ反対派が形成された。92年2月、「ダイモフク（Даймохк）」（祖国）が結成された。ウムハエフ・チェチェン民族大会前組織委員長が代表となり、チェチェンにおける主権を持った民主的、文明的国家の樹立を主たる目標とした。ダイモフクは「人民信頼政府」の樹立、新たな議会選挙の実施、チェチェンの状況および大統領職の必要性に関する国民投票の実施、こ

これらの要求を公表した。92年から93年において、ダイモフクはドゥダーエフ体制に反対する中心の一つとなった。「チェチェン・イングーシ共和国民主改革運動（Движение демократических реформ Чечено-Ингушской Республики（ДДР ЧИР）」（以下、民主改革運動）は、91年7月に民主的改革主義の同調者を結集して組織された。創設者およびリーダーはハジエフ前ソ連邦石油化学産業相やガカエフ（Джабраил Гакаев）チェチェン・イングーシ国立大学教授らであった。民主改革運動は、91年10月27日の大統領選挙と議会選挙のとき、すでに権力奪取を認めさせようとしていた全民族会議執行委員会の急進派の活動を阻止する中心となった。民主改革運動は、「チェチェン・イングーシ知識人同盟（Ассоциация интеллигенции ЧИР）<sup>57</sup>」、「チェチェン・イングーシ維持運動（Движение за сохранение Чечено-Ингушетии）」とともに反ドゥダーエフ集会の組織者となり、ドゥダーエフ反対派の核となった。

92年8月、民主改革運動はダイモフクと合同し、ダイモフクに統合された。さらに10月には、主要な反対派グループは民主主義勢力ブロック「円卓（Круглый стол）」に集結した<sup>58</sup>。他方、チェチェン議会においても反対派が作られた。92年6月～7月、約15人の議員が結集し、「バコ（Бако）」（真実）を結成した。この反対会派の事実上のリーダーとなったのは、全民族会議執行委員会前第一副議長のソスランベコフであった。バコはドゥダーエフから行政権を奪うことを要求し、議会に対し責任を持つ内閣を作ることを提案した。93年2月、ソスランベコフは在野の反対派グループと議会反対派を統一しようと試みた。この目的のため、「円卓」の党および運動の代表者からなる「民族・市民合意会議」が設立された。しかしながら、2月の終わりになると、ダイモフクと市民合意運動の指導者は民族・市民合意会議からそれぞれの代表者を引き上げさせた<sup>59</sup>。そして、反対派が結集する機会はその後訪れることはなかった。

これら反対派の活動は民主的かつ平和裏に権力の移行をめざすものであったが、武力による政権への攻撃も発生した。92年3月、政治的、経済的諸問題に何ら効果的な解決策を見出せない政権に対し、反対派の武装支持者が実力行使をするに至ったのである。彼らは自身を「チェチェン・イングーシ共和国の憲法秩序回復のための調整会議（Координационный комитет по восстановлению конституционного строя в ЧИР）」と名乗り、3月31日、急進的反対派の武装支持者はグローズヌイのテレビ局とラジオ局を占拠し、ドゥダーエフ政府の即時退陣を要求した<sup>60</sup>。しかし、この政権転覆の試みはすぐさま民族親衛隊によって鎮圧された。

## (2) 93年危機と独裁体制の確立

93年春までにチェチェンでは政治社会をめぐって矛盾が噴出し、政治的対立が引き起こされた。政権と反対派の対立は国民を分断する結果となり、大統領と議会、行政府と立法府の対立は深刻な政治的停滞をもたらした。共和国の石油資源に対する競争は政府内の集団間の争いを引き起こした。こうした状況の中で、ドゥダーエフ政権が取った道は、大統領独裁の樹立により危機から脱出を見出そうとするものであった。

表2 ドゥダージェフ政権（1991年）の主要メンバーの基本データ

役職	氏名	出生地	育ったところ	働いていた地域	職業・職場	誕生年	年齢	備考
大統領	ドゥダージェフ*	チェチェン	カザフ	ソ連邦	ソ連軍	1944	46	ソ連軍少将、軍総司令官・首相兼務
議長	アフマドフ*	カザフ	カザフ	チェチェン・イングーシ	科学研究所	1950	40	
副議長	メジドフ*	チェチェン	(カザフ)	チェチェン・イングーシ	検察庁、内務省	1943	47	取調官、法律顧問、シャリ出身
副議長、産業・建設・エネルギー・運輸・通信	グシャカエフ	カザフ	カザフ	チェチェン・イングーシ	建設	1951	39	
副議長	イジゴフ	カザフ	カザフ	チェチェン・イングーシ	建設	1948	42	グシャカエフの後任
外交	ソスランベコフ*	カザフ	カザフ			1956	34	ロシアにおいて刑事事件で起訴・服役、でっち上げによるものか詳細不明。90年にチェチェンに帰国。のちに反対派「バコ」結成
防衛・公安	スレイメノフ*	カザフ	(カザフ)	ソ連邦	ソ連軍	1953	37	クンタ＝ハッジの末裔。のちに反対派民族保護委員会結成
立法・法律・法秩序	エジスルタノフ	—	—	—	—	—	—	
マスメディア・情報	ヤンダルビエフ*	カザフ	カザフ	チェチェン・イングーシ	技師・出版・印刷	1952	38	第2代大統領
経済・予算・財政	マリサゴフ	北オセチア	(北オセチア)	北オセチア	北オセチア・ゴスプラン	1960	30	プリゴロドヌイ地区出身、モスクワ大学卒
農業政策・食料	フンカルビエフ	—	—	—	—	—	—	
科学・教育・文化・スポーツ・青少年	アルサミコフ	—	—	—	—	—	—	
情報・出版相	ウドゴフ*	チェチェン	チェチェン	チェチェン・イングーシ	新聞、テレビ	1962	28	チェチェン・イングーシ国立大学卒
外相	ベノ	ヨルダン	ヨルダン	ソ連邦・海外勤務	КТБ 海外課報機関勤務、湾岸危機に関与	1958	32	1970年、チェチェンに家族と帰還、チェチェン・イングーシ国立大学卒



	役 職	氏 名	出生地	育った ところ	働いていた 地域	職業・職場	誕生年	年齢	備 考
内 閣	外相	ユセフ	ヨルダン	ヨルダン・サ ウジアラビ ア	ヨルダン・サ ウジアラビ ア	技師、ビジ ネス	1941/49	49/41	1992年、チェチェン 帰還、ペノの後任
	第一副首相、経済相 〔前〕	アブバカロフ 〔前〕	カザフ	カザフ	チェチェン・イ ングーシ	チェチェ ン・イ ン グーシ国立 大学	1948	42	モスクワ国立大学卒
	内相	アルスルタノフ 〔前〕	チェチェン	カザフ	チェチェン・ イングーシ	共和国警 察、ロシア 共和国内務 省	1936	54	キエフ特別警察学校 卒
	第一副首相	マモダエフ*	カザフ	カザフ	ソ連邦	ヴォルゴグ ラード、ト ルクメンの 石油・ガス 企業	1953	37	アブバカロフの後 任、技師、経済学者
	教育相	ヤンダロフ〔党〕	チェチェン	(カザフ)	チェチェン・ イングーシ	ソヴィエト 共産党共和 国党委員会 書記	1937	53	チェチェン・イ ン グーシ国立大学教授 (前職)、91年まで最 高会議副議長
軍	参謀長	シャハボフ	—	—	—	—	—	—	
	副参謀長	マスハドフ*	カザフ	カザフ	ソ連邦	ソ連軍	1951	39	ソ連軍大佐、第3代 大統領
参 考	共産党第一書記	ザヴガエフ〔党〕	チェチェン	カザフ	チェチェン・ イングーシ	ソフホー ズ、ソヴィ エト共産党 共和国党委 員会	1940	50	ゴールスク農業大学 卒
	ロシア連邦最高会 議議長	ハズブラートフ	チェチェン	カザフ	モスクワ	社会科学学 術情報研究 所	1942	48	カザフ国立大学卒、 モスクワ国立大学 卒、同大学院(経済 学)修了

(出所：筆者作成)

注) 議会の役職の項目は委員会議長職。氏名欄の\*はチェチェン人民全民族会議のメンバーおよび支持者。〔前〕は前職の継続。〔党〕は共産党関係の職務。〔—〕は資料の欠如により不明。括弧書きは状況より推測。外相ユセフの誕生年は1941年と49年の二説あり。年齢は1990年の満年齢。

92年10月、「ノフチ=チョ (Нохчи-чо)」(チェチェン国家)(または「ノフチ=チョ」独立支持運動)が設立された。この組織は、反対派の政党や運動側から行われている根拠のない非難から大統領を守ることを目的として、グデルメスで結成された。実質的な指導者は、検事総長のシェリポヴァとグデルメス地区知事で大統領親衛隊隊長のラドゥエフ(Сарман Радугев)であった。この大統領派の集団は、ドゥダーエフが合法的に権威主義的権限を供与し、同時に立法的権威を低下させることを企図した。そして、すべての野党と反対派の活動を厳格に禁止し、言論の自由と人権の制限を提起した<sup>61</sup>。

ノフチ=チョの指導者たちの多くはドゥダーエフ体制の軍事組織と関係していた。こうした大統領支持派が在野勢力として出現したことは、反対派への大きな圧力となった。反対派による民主的かつ平和的な抗議行動にも限界が見えてきた。こうした状況下、93年4月15日から6月4日まで、急進反対派は大統領と議会の廃止と新議会選挙の実施の要求を掲げ、グローズヌイの劇場広場で示威活動を行った<sup>62</sup>。これに対しドゥダーエフは、4月17日、反対派の運動を利用し、議会と憲法裁判所、グローズヌイ市議会の解散を宣言し、共和国に大統領直轄統治を導入した。市民の外出禁止時間も設定された。ドゥダーエフ寄りでなかった内務省は解体され、副大統領と検事総長の職は議会の同意なしで任命を可能にした<sup>63</sup>。

共和国議会と憲法裁判所は大統領の命令や行動が法的手続きから逸脱していると認定した。これに対し、親ドゥダーエフの立場にあったイジコフ副議長とヤンダルビエフら議員10人が代議員職を辞した。93年5月、共和国議会議長にバコの指導者のソスランベコフが選出された。彼の主導で議会はドゥダーエフの首相解任決議を採択し、マモダエフ第一副首相に「人民信頼政府(Правительство народного доверия)」を創設するよう全権委任した<sup>64</sup>。しかし、93年6月、バサエフ(Шамиль Басаев)の指揮下、ドゥダーエフ派の武装グループは共和国議会の本会議や憲法裁判所法廷を開催するグローズヌイ市議会ビルを占拠した。この実力行使によって、劇場広場で繰り広げられていた反対派の大衆集会は、軍事衝突の危険を考慮し、自然崩壊してしまった<sup>65</sup>。共和国国家書記のアクブラトフ(Асламбек Акблатов)準備委員会は大統領独裁のための憲法修正を検討していた。この準備委員会の方針に沿って憲法の修正がなされ、大統領独裁は93年6月半ばに樹立された<sup>66</sup>。

## 6. むすびに代えて

最後に、チェチェン革命について、ナショナリズムと革命という視点からまとめてみたい。

チェチェン革命はチェチェン人による民族自決を求める政治的運動であった。すでにチェチェン・イングーシ自治共和国という民族自治単位を持っていたチェチェン人であったが、共和国の自治はロシア人をリーダー(第一書記)とした共産党の支配下にあった。革命の第一歩は、ザヴガエフによる共産党の民族化(チェチェン化)であった。そして革命が本格的に達成されるのは、ドゥダーエフのリーダーシップによるものであった。ザヴガエフの共産党第一書記を歓迎した人々は、再びドゥダーエフのチェチェン人民全民族会議を熱狂的に支持していった。チェチェン革命の道程に関与した運動

家や政治家、知識人のほとんどが当時40代か50代であり、1944年の強制移住のため幼少期をカザフスタンで送ったものがほとんどであった。前掲の表2における「出生地」と「育ったところ」の項目を参照してもわかるとおり、ドゥダエフ政権の主要メンバーのほとんどが強制移住の影響を受けていた。ドゥダエフが自分たちと同じように強制移住の過酷な経験を持ちながらも、ソ連においてロシア人と肩を並べて出世し、自分たちの誇りとしてチェチェンに帰還した。チェチェンの民衆が彼を喜んで迎え入れたことは想像に難くない。

しかしながら、その過程において、政治家や運動家、知識人のレベルにおいて彼から離れていく人も少なくなかった。それはチェチェン・ナショナリズムを作り出す原動力となる二つの帰属意識によるものであろう。一つはまさに国家を作ろうとするチェチェン民族というアイデンティティに基づくものであった。もう一つはそれぞれの人が帰属していた集団（タイプ、スーフィー教団）であった。後者はナショナリズムを作り出す重要な要素（伝統、文化、宗教など）であり、統合のため必要不可欠なものである。だが、後者に力点が置かれ、人々のアイデンティティを分けるものとして使われると、民族という一体感を分裂させる傾向を持つ。前述したとおり、チェチェン・ナショナリズムの原初的傾向は、後者の傾向を呼び起こしやすく、いったん統合の勢いが喪失すると、容易に分裂傾向を招くようになる。さらに、指導者がそれを克服しようとせず、そうした分裂傾向を利用しようとすると、ナショナリズムは統合能力を失い、集団間政治へと転換してしまう。すでに、チェチェン革命の過程でその傾向は現れており、集団間政治への転化を感じさせる。

政治学的に言えば、革命とは政治体制の根本的な変化を伴うものである。ハンチントン（Samuel Huntington）は「革命とは、ある社会の主要な価値と神話、その社会の政治諸制度、社会構造、指導者層および政府活動と政府政策における急速で根本的な暴力を伴った国内的変動である」と定義している<sup>67</sup>。チェチェン革命の特徴の一つは、ソ連における構成共和国や自治共和国の政治変動においてみられるエリートの継続性が低いことであった。したがって、エリートの断絶は体制転換には好都合であったが、新体制の構築には負の要素として働いた。

ドゥダエフ体制の発足時にはそれまでともに行動をしてきた全民族会議のメンバーやその支持者が名を連ねていた。しかし実際に国家を運営しなければなくなるとドゥダエフに対する求心力は一気に低下した。経済政策やロシアとの関係をめぐってエリートたちは対立し、最終的に分裂していった。政府内で対立したエリートは政府を離れ、外からドゥダエフ政権に抗議を行っていった。反対派はそれぞれのエリートの支持者を動員して反対集会を組織した。政治的閉塞感や経済的不満は民衆を急進化させた。他方、93年半ばの時点でドゥダエフの近くにいた人物はイジコフとヤンダルビエフぐらいであった。その代わりとして、バサエフやラドゥエフといった野戦司令官や軍関係者が彼を取り囲むようになる。政権側も軍事行動を準備し、反対派と同様に急進化していったのである。

〔付記〕本稿は日本国際政治学会2007年度大会ロシア・東欧分科会における同名の報告に修正を加えたものである。また、本稿は科学研究費補助金の交付を受けた「グローバル時代における人間存在と

国際関係論の再構築 ―実在変容の認識論と実践論― の研究成果の一部である。

【注】

- 通常、地名を表すときは、チェチニヤ（Чечня）とイングーシチャ（Ингушетия）と称する。しかし、共和国を付して使用する場合、チェチェンの場合、形容詞を使うためチェチェン共和国（Чеченская Республика）となる（イングーシの場合 Республика Ингушетия）。したがって、共和国の有無により表記が替わることは煩雑となるので本稿では統一できる範囲で「チェチェン」「イングーシ」とする。また、地名や人名を含む固有名詞のカタカナ表記に際しては、発音よりも綴りを重視し表記する。チェチェン語はロシア語と同様キリル文字を使用しているが、チェチェン語にはロシア語にない音があり、それらを表記するためアルファベットが改変されたり、追加されたりしている。そのため、ロシア語で翻字した場合、原語(チェチェン語)と必ずしも一致するわけではない。またチェチェン・イングーシでは長くロシア語も使用されてきたため、チェチェンやイングーシ固有の「もの・こと」が現地のロシア語の語彙に含まれるようになった。これらの「もの・こと」はチェチェン語と同一または近似しているが、必ずしも同じ綴りではない。したがって、必要と判断されるものについては括弧内にロシア語とチェチェン語の両方を提示する。「/」を使用し2語示してあるものは「ロシア語/チェチェン語」である。また注で補足説明をしているものもある。両言語をラテン文字に翻字すると原語の綴りからさらに離れることになるため、本稿ではキリル文字を使用する。
- チェチェン・イングーシの人口動態は以下のとおり。なお、1992年6月4日にチェチェン・イングーシは、チェチェンとイングーシに分離した。

(単位：人)

共和国名	チェチェン・イングーシ		チェチェン	イングーシ
	1979年	1989年	2002年	2002年
チェチェン人	611,405(53.0%)	734,501(57.5%)	1,031,647(93.5%)	95,403(20.4%)
イングーシ人	134,744(11.7%)	163,711(12.9%)	2,914( 0.2%)	361,057(77.3%)
ロシア人	336,044(29.1%)	293,771(23.1%)	40,645( 3.7%)	5,559( 1.1%)
合計	1,155,805	1,270,429	1,103,686	467,294

(典拠)

1979：Численность и состав населения СССР, М., 1985, с. 82.

1989：Итоги Всесоюзной переписи населения 1989 года. т. , ч. 1, 1992, с. 196-201.

2002：1.2 Численности городского и сельского населения, мужчин и женщин по субъектам Российской Федерации; 3 Население по национальности и владению русским языком по субъектам Российской Федерации // Всероссийская Перепись Населения 2002 года. [ <http://www.perepis2002.ru/>] (以下、URLは2008年2月29日現在有効)

- Zelkina (1996, 240).
- 脱共産主義（または脱社会主義）とは政治体制と経済体制の転換を含む概念である。本稿では、その中から共産党による支配体制の転換、イデオロギーを含む政治信条体系の転換に限定して考察を行う。脱共産化（脱社会主義化）については塩川（1999）を参照。
- Heradstveit (1998, 381-385).
- Heradstveit (1998, 386-391).
- Jaimoukha (2005, 117-118). スーフィズムの修行においては導師（シャイフまたはビールと呼ばれる）が弟子（ムリード）を指導する形態が取られ、奥義は師から弟子へと伝えられる。中央アジアのスーフィズムについては帯谷（1995）を参照。同論文ではチェチェンのカーディリー教団が中央アジアに与えた影響についても言及している。

- 8 党首はガンタミロフ (Бислан Гантамиров)。1991年～93年、グロズヌイ市長に就任したが、その後ドゥダエフ反対派に回った。
- 9 ヤメリヤノヴァによると、1991年10月、チェチェン共和国のムフティーに選ばれたパシール (Муххамад-Башир-хаджи Арсанукаев) はナクシュバンディーで、同年の大統領選挙期間中ドゥダエフを支持することを拒否した。その結果、チェチェン民族主義者のカーディリー教団への接近を促した。民族主義者とカーディリー教団との同盟には、ドゥダエフの実兄で、カーディリーの地域指導者のベクムルザ (Бекмурза) によって演じられた (Yamelianova, 2001, 671-672)。ベクムルザについての資料は少なく彼に触れていても引用文献の明記がない場合が多い。クンタ=ハジ・ヴィルド (教団の下位集団) のウスターズ (教師) であったという記述もある。  
P. Г. Ланда, "Политический ислам: предварительные итоги". [[http://ansar.ru/archives/arch\\_2006/06.01.17history.html](http://ansar.ru/archives/arch_2006/06.01.17history.html)]
- 10 第一次紛争では多くのスーフィ・チェチェン人がロシア軍と戦った。その後彼らはロシアよりもワッハーブ派のほうがより深刻な脅威をもたらすと認識していた。両者の緊張は武力衝突にまで及んだ。第二次紛争が内戦的要素を含む一つの理由はここにある (Henkin, 2006, 193)。
- 11 タイプには二つの意味があり、第一はいわゆる氏族を表し、チェチェンおよびイングーシのある地域居住者で数百の家族からなる拡大血族集団である。第二は血縁関係のあるすべての親類を含む大家族を意味する (Sokirianskaia, 2005, 456-460)。ここでは第一の意味で使用する。なお、チェチェン語ではタイパ (тайпа) と言うが、ここでは混乱を避けるため、ロシア語で使用されているタイプという語を使用する。
- 12 チェチェン語ではガーラ (гара)。
- 13 チェチェン語ではトゥファム (тухам)。チェチェン政治の民族的側面については北川 (2000, 39-42) が詳しい。
- 14 括弧内はロシア語、チェチェン語の綴りの順。Jaimoukha (2005, 85-89, 124-125); Ильясов (2006, 181)。
- 15 Sokirianskaia (2005, 458)。
- 16 チェチェン紛争に関する先行研究において、1980年代のチェチェン・イングーシ自治共和国の政治状況に関する記述は非常に乏しい。たとえば、リーヴェン (Lieven, 1998) では、80年代の記述は89年のソヴィエト議会選挙に関するもののみである。それは、この著作が現地取材をもとに書かれたものでもあり、90年代の政治変動が研究対象となっているためでもあった。ガールとデヴァールでは、チェチェン国立アルヒーフ (グロズヌイ) 所長の言を引用し、1980年代初頭には、「第20回党大会でフルシチョフがあなた方 [強制移住させられたチェチェン人とイングーシ人] を復権させると言われたけれども、実際には、あなた方は復権させるのではなく、単に (帰還を) 許されたただけであったという考えを広げようとする試み」が存在したことを指摘している。また別の箇所では、ブレジネフ期のイデオロギー担当であったスースロフ (Михаил Суслов) によるイデオロギー強化を紹介している (Gall and de Waal, 1998, 74-75, 79)。しかし、この著作では、インタビューが主体として構成されているため、80年代前半の歴史的事情について本来あるべき出典が提示されていない。シーリィ (Seely, 2001) にはほとんど記述がない。ゲルマンはヴィノグラドフの「自発的加入」を紹介している (German, 2003, 22-23)。
- 17 スースロフおよびヴラソフに関する記述については歴史家のムザエフ (Тимур Музаев) の見解に従った。  
Музаев, "Чеченская Республика Ичкерия: Общий обзор". [[http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct\\_97/chechen.html](http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct_97/chechen.html)]
- 18 ヴィノグラドフは1938年グロズヌイ生まれ。彼の概念については Виноградов (1987) を参照。
- 19 Музаев, "Чеченская Республика Ичкерия: Общий обзор". [[http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct\\_97/chechen.html](http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct_97/chechen.html)]
- 20 Rywkin (1993, 347-364)。
- 21 ゲルマンはエズブラトフの主張について、この工場で生産される化学物質はアミノ酸の一種のリジンであったが、リジンが工場労働者や地域住民の健康に影響を与えるかどうかについては不明な部分が多く、健康を根拠にした建設反

- 対は、結局、政治的敵愾心を煽った大衆抗議活動のための口実に過ぎなかったと指摘している (German, 2003, 172)。
- 22 カフカス関連ニュースを扱っている通信社カフカス・センターの時系列的に主だった出来事を記した《Как это было ...》 [[http://old.kavkazcenter.com/russ/history/asuev\\_book/asuev.shtml](http://old.kavkazcenter.com/russ/history/asuev_book/asuev.shtml)]には、1988年5月23日、グデルメスにて生物化学コンビナート建設に対し数千人規模の集会在自然発生的に起こったとある。この記述はチェチェンのジャーナリストのアスエフ (Шарип Асуев) による。
- 23 代表にはチェチェン・イングーシ国立大学の物理数学の教員ゴイテミロフ (Рамзан Гойтемиров) が就き、エズブラトフも指導部に入った。
- 24 代表は技師のビスルタノフ (Хож-Ахмед Бисултанов)。1990年12月からは「チェチェン・イングーシ人民戦線 (Народный фронт Чечено-Ингушетии)」に改称。
- 25 詳細は以下を参照。Региональные организации и движения [[http://www.nasledie.ru/oborg/2\\_16/t1/08.htm](http://www.nasledie.ru/oborg/2_16/t1/08.htm)]
- 26 Lieven (1998, 57)。
- 27 44年2月、チェチェン人とイングーシ人は対ドイツ協力を理由に両民族の全住民をカザフスタンとキルギスタンへ貨車により強制的に移送した。チェチェン人は約40.8万人、イングーシ人は約9.2万人。同年3月にはチェチェン・イングーシ自治共和国は廃止され、グローズヌイ自治州が作られた。57年1月、チェチェン・イングーシ自治共和国が再建され、両民族の帰還が認められた。
- 28 German (2003, 23)。
- 29 1940年12月、チェチェン・イングーシ自治共和国ナドテレチュヌイ地区ベノ・ユルト村生まれ。44年、家族とともにカザフスタンへ強制移住。57年までカラガンダ近郊トカレフカ村落に居住。58年からナドテレチュヌイ地区で小学校教員、組立工として勤務。ソフホーズ主任技師を経て、66～71年、「ズナメンスキー」ソフホーズ総支配人。66年、ゴールスク農業大学卒業。72～75年、共和国ソフホーズ合同体主任。75年、共和国農業相。77年から州党委員会勤務。77～78年、農業担当主任、78～83年、書記。83年～89年、第二書記、農業問題担当。
- 30 ゲルマンは5つの地区 (マルゴベック、ナズラン、スンジャ、ノジャイユルト、アチホイ・マルタン) 共産党第一書記の辞職を挙げている。しかしリウキンによれば、マルゴベックは市共産党であり地区共産党ではない。なお地区は16あり、ゲルマンが指摘したマルゴベックを除く4つの地区の第一書記はすべて非ロシア人 (ルイキンはムスリムと表記) であり、「地区革命」「第一書記の春の落葉」と呼ばれる一連の党指導部の一掃は必ずしもロシア人を対象としたものでなく、チェチェン人を含む党エリートに対し長年の腐敗を弾劾するものであった。マルゴベック市共産党の第一書記も非ロシア人であった。German (2003, 25); Rywkin (1993, 350-356)。なお、「第一書記の春の落葉」はムザエフの言。Музаев, "Чеченская Республика Ичкерия: Общий обзор". [[http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct\\_97/chechen.html](http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct_97/chechen.html)]
- 31 Юрий Кульчик, "К предыстории чеченского кризиса". [<http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/1995/0195/20.html>] クリチックは人文政治学研究所 (ИГПИ) 研究員。
- 32 民主主義イニシアチヴの指導者は、エリムルザエヴァ (Ганга Эльмурзаева)、チョールヌイ (Юрий Чёрный)、タマロフ (Владимир Тамаров)、主権の指導者は、ウムハエフ (Лечи Умхаев)、ツォカエフ (Руслан Цокаев)、オスマエフ (Амин Осмаев) である。彼らは、ドゥダーエフのチェチェン・イングーシ招聘を実現させるが、その後、ドゥダーエフ政権の主要な反対派となる。
- 33 Россия и Чечня (1990-1997 годы): Документы свидетельствуют, М., РАУ-Университет, 1997, с. 7-10.
- 34 ヴァйнаフ民主党の前身は89年8月に結成されたチェチェン人知識人の結社「バルト (Барт)」(合意・統一) である。90年5月に設立大会を開催しヴァйнаフ民主党となった。「ヴァйнаフ」はチェチェン人とイングーシ人の総称である。しかし実際にはチェチェン人だけで組織されていた。
- 35 1952年12月カザフスタン共和国ヴィドリク (Выдрик) 村生まれ。チェチェン人。69-70年、雑務労働・煉瓦職工として従事。72年、チェチェン・イングーシ共和国、グローズヌイ市中等職業専門学校を卒業 (専門は油井ボーリング)

- 補助技術)。72～74年兵役。74～76年、油井採掘作業に従事。75～85年、チェチェン・イングーシ国立大学文学部（通信教育）で学ぶ。76～85年、チェチェン・イングーシ書籍出版所勤務。製造部主任になる。85～86年、ソヴィエト作家同盟芸術作品宣伝委員会議長。ソ連およびチェチェン・イングーシ共和国作家同盟委員。89年、チェチェン・イングーシ人民戦線に参加。96年、チェチェン・イチケリア共和国第2代大統領就任。
- 36 1944年1月、チェチェン・イングーシ自治共和国のヤルホリ（Ялхори）村生まれ。チェチェン人。その1ヶ月後にスターリンによる強制移住が行われ家族ともどもカザフ共和国（現カザフスタン共和国）へ送還。57年、家族とともに共和国に帰還。62年、タンボフ・長距離パイロット養成高等士官学校に入学。飛行操縦士資格授与。66年、共産党員。モスクワ等で勤務の後、71～74年、ガガーリン空軍アカデミーの軍事司令官プログラム修了。シベリア、ウクライナおよび沿バルトの軍管区において、76～78年、航空連隊副司令官、78年～79年、参謀長、79年～80年、特殊部隊司令官、80年～82年、航空連隊司令官、82年～87年、師団司令官。88年～89年、アフガン戦争参加。87年～91年3月、エストニア・タルトゥ戦略爆撃基地で、核兵器部隊と長距離爆撃部隊の指揮官を務める。彼の当地での赴任期間とエストニアで起こっていた民族運動、いわゆる「エストニア革命」の時期が一致し、彼がこの民族運動の影響を受けたと言われる。ロシア女性アール・フェドロヴナと結婚し、二男・一女をもうける。
- 37 ドゥダーエフの妻アール（Алла Дудаева）の回想録によれば、チェチェン民族大会組織委員会の招待を受け、90年10月にグローズヌイに入った。執行委員会議長への選出に際しは、ドゥダーエフは即答を避け、熟慮の結果翌日候補になることに同意した。12月6日に「全民族大会」のメンバー93名により選出された（Дудаева, 2003, 116）。
- 38 主権宣言は以下を参照。Россия и Чечня (1990-1997 годы): Документы свидетельствуют, М., РАУ-Университет, 1997, с.7-10. 主権宣言の内容の変遷および採択に至る経緯については、塩川（2007, 181-184）が詳しい。
- 39 Музаев, "Чеченская Республика Ичкерия: Общий обзор". [[http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct\\_97/chechen.html](http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct_97/chechen.html)]
- 40 アールの回顧録によれば、ドゥダーエフと彼の家族は全民族会議執行委員会議長に就任した後、タルトゥに戻った。そこにヤンダルビエフとウムハエフが訪問し、ドゥダーエフに軍を退任し、議長職に専念するよう説得したとしている（Дудаева, 2003, 117）。
- 41 Музаев, "Чеченская Республика Ичкерия: Общий обзор". [[http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct\\_97/chechen.html](http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct_97/chechen.html)]; 徳永（2003, 54）。また、塩川（2007, 185）は、ドゥダーエフが共和国最高会議が正統性を喪失し、民族大会執行委員会が人民の信頼を得ている、などと語ったことを紹介している。
- 42 1950年、カザフスタン共和国生まれ。チェチェン・イングーシ国立大学歴史学部卒業後、歴史学研究所研究員。80年代初め、「チェチェン・イングーシのロシアへの自発的加入」という公式見解を批判し、85年、研究員除名。
- 43 1991年後半におけるロシアを含めたチェチェンの政治状況の把握・分析は塩川（2007, 191-203）が詳しい。
- 44 臨時最高会議の定員は32人と決められたが、その後13人、9人と減員された。中身はアフマドフ派4名、チョールヌイ派5名であった。
- 45 Россия и Чечня (1990-1997 годы): Документы свидетельствуют, М., РАУ-Университет, 1997, с.29-31.
- 46 Кульчик, "К предыстории чеченского кризиса". [<http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/1995/0195/20.html>]
- 47 1991年4月26日に「被追放民族復権法」が制定され、イングーシ人は旧領土の返還と個人の不動産の返還を求め、オセット人と係争状態に入った。92年には武力紛争状態（北オセチア・イングーシ紛争）となる。
- 48 チェチェン・イングーシ主権宣言の第17条。「イングーシの奪われた領土の回復の決定後に連邦条約は調印される」としている。主権宣言は以下を参照。Россия и Чечня (1990-1997 годы): Документы свидетельствуют, М., 1997, с.7-10.
- 49 例えば、Юрий Кульчик и Асрудн Адилсултанов, "Чеченцы-Аккинны (Ауховцы) и их гражданские формирования". [[http://www.igpi.ru/bibl/igpi\\_publ/dag\\_akk/chechen.html](http://www.igpi.ru/bibl/igpi_publ/dag_akk/chechen.html)]

- 50 1994年1月、チェチェン共和国は名称をイチケリア・チェチェン共和国と変えた。「イチケリア」はチェチェンの南東部の山岳地域を指す呼称で、「ノフチ=チョ」(チェチェン全体)から地域的にも空間的にも限定された意味をもたせたとされる。
- 51 イングーシの情勢については、塩川(2007, 186-203)が詳しい。
- 52 議会は二院制で共和国会議(上院、20人)と人民会議(下院、41人)に分かれていた。
- 53 「カフカース」協会党首・全民族会議執行委員会幹部会委員。
- 54 建設会社「スンジャ」代表。92年12月から「グロズトウルボプロヴォツトラ」自動管理システム-1トラスト(企業複合体)主任技師イジコフ(Ахъяд Идигов)が担当する。
- 55 Абубакаров(1998, 52-61)。
- 56 Музаев, "Чеченская Республика Ичкерия: Общий обзор". [[http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct\\_97/chechen.html](http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct_97/chechen.html)]; Абубакаров(1998, 90-96)。
- 57 1991年4月、チェチェン・イングーシの民族知識人の社会政治連盟として設立。代表者は、マゴマエフ(Хасмагомед Магомаев)教育大学講師で、指導部にはガカエフらが名を連ねている。
- 58 ダイモフク、「マルシヨ(自由)」党("Маршо")(92年8月に創設)、「市民合意」運動("Гражданское согласие")(90年末創設)、「ノフチ・モフ」運動(Нохч-Мохк)や人民戦線が参加。
- 59 Музаев, "Чеченская Республика Ичкерия: Общий обзор". [[http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct\\_97/chechen.html](http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct_97/chechen.html)]
- 60 Там же. なおこの組織は「チェチェン・イングーシ維持運動」が母体となっていた(Зураб Тодуа, "Оппозиция режиму Дудаев в Чечне". [<http://www.panorama.ru/gazeta/p33chec.html>])。ゲルマンはこの試みの背後にロシアの策謀があると推論している。その一つの理由として、その日が新しい連邦条約の調印日であったことを挙げている(German, 2003, 81-82)。またシーリィは、ザヴガエフとハズブラートフが関与したと記述している(Seely, 2001, 118)。
- 61 管見ながら、ドゥダーエフ大統領支持側の政治運動組織についてはほとんど記述が見当たらない。ここではデータベース「ラビリント」(База данных "Лабиринт")に依拠した[<http://www.labyrinth.ru/content/card.asp?cardid=28684>]。
- 62 1993年前半の出来事については、以下を参照。Россия и Чечня(1990-1997 годы): Документы свидетельствуют, М., РАУ-Университет, 1997, с.51; Куликов и Лембик(2000, 44)。
- 63 Музаев, "Чеченская Республика Ичкерия: Общий обзор". [[http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct\\_97/chechen.html](http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct_97/chechen.html)]
- 64 Там же。
- 65 Криминальный режим. Чечня, 1991-1995 гг.: факты, документы, свидетельства, М., "Кодекс", 1995, с. 47-48。
- 66 Музаев, "Чеченская Республика Ичкерия: Общий обзор". [[http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct\\_97/chechen.html](http://www.igpi.ru/monitoring/1047645476/oct_97/chechen.html)]
- 67 ハンチントン(1972, 281)。

#### 【参考文献】

- 帯谷知可(1995)「中央アジアにおけるスーフィズム-バスマチ運動とタリーカ」原暉之・山内昌之『講座スラブの世界②スラブの民族』(弘文堂)232-249ページ。
- 北川誠一(2000)『旧ソ連圏における市民的アイデンティティの研究(平成11年度教育研究共同プロジェクト経費成果報告書)』(東北大学)。
- サミュエル・ハンチントン(1972)『変革期社会の政治秩序(下)』(サイマル出版会)。



- 塩川伸明 (1999) 『現存した社会主義 リヴァイアサンの素顔』 (勁草書房)。
- 塩川伸明 (2007) 『ロシアの連邦制と民族問題－多民族国家ソ連の興亡Ⅲ』 (岩波書店)
- 徳永晴美 (2003) 『ロシア・CIS 南部の動乱－岐路に立つプーチン政権の試練』 (清水弘文堂書房)。
- Gall, Carlotta and de Waal, Thomas (1998) *Chechnya: Calamity in the Caucasus*, New York: New York University Press.
- German, Tracey C. (2003) *Russia's Chechen War*, London: RoutledgeCurzon.
- Henkin, Yagil (2006) “From tactical terrorism to Holy War: the evolution of Chechen terrorism, 1995-2004”, *Central Asian Survey*, vol. 25, no. 1-2, pp. 193-203.
- Heradstveit, Daniel (1998) “Nationalism and Ethnic Nationalism in the Caucasus: Past and Present”, in Ole Hoiris and Sefa Martin Yurukel, *Contrasts and Solutions in the Caucasus*, Aarhus: Aarhus University Press, pp.362-398.
- Hughes, James (2007) *Chechnya: from nationalism to jihad*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Jaimoukha, Amjad (2005) *The Chechens: A handbook*, London: RoutledgeCurzon.
- Lieven, Anatol (1998) *Chechnya: Tombstone of Russian Power*, London: Yale University Press.
- Rywkin, Michael (1993) “Power and ethnicity: party staffing in the autonomous republics of the Caucasus in the middle 1980s”, *Central Asian Survey*, vol.12, no.3, pp.347-364.
- Seely, Robert (2001) *Russo-Chechen Conflict, 1800-2000: A Deadly Embrace*, London: Frank Cass Publishers.
- Sokirianskaia, Ekaterina (2005) “Families and clans in Ingushetia and Chechnya. A fieldwork report”, *Central Asian Survey*, vol. 24, no. 4, pp. 453-467.
- Yamelianova, Galina M. (2001) “Sufism and Politics in the North Caucasus”, *Nationalities Papers*, Vol. 29, No. 4, pp. 661-688.
- Zelkina, Anna (1996) “Islam and society in Chechnia: from the late eighteen to the mid-nineteenth century”, *Journal of Islamic Studies*, vol. 7, No. 2, 240-264.
- Абубакаров, Таймаз (1998) Режим Джохара Дудаева: правда и вымысел: записки дудаевского министра экономики и финансов, М., ИНСАН.
- Виноградов, Виталий (1987) Россия и Северный Кавказ (Обзор литературы за 1976-1985 годы: итоги и перспективы изучения). // История СССР, т. 3 (май-июне 1987), с. 89-101.
- Дудаева, Алла (2003) Миллион первый, М., Ультра. Культура.
- Ильясов Л. (2006) Чеченский тейп. // Ибрагимов Х.И. отв. ред. Чеченская Республика и чеченцы: история и современность: материалы Всероссийской научной конференции. Москва, 19-20 апреля 2005 года, М., Наука, с. 176-185.
- Куликов, Анатолий и Лембик, Сергей (2000) Чеченский узел: хроника вооруженного конфликта 1994-1996 гг., М., Дом педагогики.

## Чеченская революция и режим Джохара Дудаева

НОДА Такэхито

В ноябре 1990 года в Грозном состоялся Первый Чеченский национальный съезд, декларировавший суверенитет Чеченской республики (ингуши в это время выступали уже с требованием воссоздания отдельной ингушской национально-территориальной автономии). На съезде был избран руководящий орган – Исполнительный комитет (Исполком), получивший позднее название Исполкома Общенационального конгресса Чеченского народа (ОКЧН), который возглавил генерал Джохар Дудаев. Выборы в Чечне состоялись 27 октября 1991 года. Президентом был избран Председатель Исполкома ОКЧН Джохар Дудаев. Вскоре объявили и состав парламента.

В результате “Чеченской революции” Чечено-Ингушская Республика оказалась разделена на Чеченскую Республику и Республику Ингушетию. В Чеченской Республике к власти пришли лидеры радикального крыла чеченского национального движения во главе с Джохарым Дудаевым.